慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ウィエンチャンの滅亡に関するタイ文史料註釈(1)
Sub Title	A Japanese translation with notes from Thai materials on the fall of Wiangchan in the nineteenth century (I)
Author	木村, 宗吉(Kimura, Sokichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1967
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.40, No.2/3 (1967. 11) ,p.241(403)- 261(423)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松本信廣先生古稀記念
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19671100-0245

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ウィエンチャンの滅亡に関する・タイ文史料註釈 (1)

木村宗吉

まえがき

一八世紀初め、ラオスは、北のルワンプラバーンと南のウィエンチャンに分裂した。周知のように、越南史料は、前者を南掌、後者を万象と称する。分裂後、ルワンプラバーンとウィエンチャンは、互いに抗争を続けたが、一八世紀末、ウィエンチャンはタイ国に屈し、タイ国の支配するところとなつた。越えて一九世紀に入ると、ウィエンチャン最後の王、チャオ・アヌが王位につくが、アヌは、一八二七年、タイ国に対して戦端を開き、遂に国を滅ぼすに至る。このように分裂後のラオスは、内部抗争と、タイ国の圧力により衰え、ウィエンチャンは滅亡し、ルワンプラバーンのみが、タイ国に支配されながらも、辛うじて王統を保つた。

一八二七年におけるアヌの挙兵から一八二九年におけるアヌの死に至る間の経緯を示す史料は、一はタイ史料、一は越南史料、すなわち「大南寔録正編第二紀」であり、越南史料から知り得るところも少なくない。

タイ史料として、まず見るべきものは、Čhaophraya Thiphakǫrawong 撰の「バンコク王朝第三世王年代記」(Phra-ratchaphongsawadan Krung Ratanakosin Ratchakan Thi 3)である。著者 Čhaophraya Thiphakǫrawong(1812～1870) は、三世王（在位一八二四～一八五一）時代から五世王（在位一八六八～一九一〇）時代の初めにかけて政府の

要職を歴任した政治家である。Thiphakǫrawong は、晩年、五世王の命により、一世王から四世王までの「バンコク王朝年代記」を、わずか二年たらずで完成した。「バンコク王朝年代記」は、このように短時日の間に書かれたので、不備の点多く、「一世王年代記」は、Damrong 親王の改訂により一九〇一年に、「二世王年代記」は、同じく Damrong 親王の改訂、というよりは Damrong 親王著ともいうべきかたちで一九一六年に出版された。その後、Damrong 親王は、「年代記」の改訂を断念したものの如く、「三世王年代記」と「四世王年代記」は、ほぼ原文のままで、一九三四年に出版された。このように、Thiphakǫrawong の「年代記」、とくに改訂されなかった「三世王年代記」と「四世王年代記」は種々不備の点を有するが、著者が同時代の政府の高官であり、また、それが唯一の官撰の年代記であるから、この時代の歴史を研究する者が、まず見るべき重要な文献である。（Cf, 石井米雄氏「タイ語文献について(3)」、東南アジア研究第二巻第二号。）。

本訳の目的は、「三世王年代記」の関係部分を訳し、あわせて越南史料を示し、一八二七年から一八二九年に至る間の経過を辿ることにある。それを整理する仕事は、後日に譲る。また、この事件前後の諸問題についても、ここでは触れない。私が使用したテキストは、一九六三年、バンコクの Khlang Witthaya 書店が出版した「三世王年代記」と「四世王年代記」の合本（Phraratchaphongsawadan Krung Ratanakosin chabap Hǫsamuthaengchat: Ratchakan Thi 3-Ratchakan Thi 4, Samnakphim Khlang Witthaya, Bangkok, B. E. 2506.）であり、関係部分は、四一頁から九一頁までである。今回の(1)は、その四一頁から五五頁までにあたり、アヌの挙兵からタイ軍のバンコク出発までである。タイ語の表記法は、W. F. Vella が "Siam under Rama III" において用いた方法に従った。註に引用した若干の参考文献の簡称は、次の通りである。

三世王年代記：Phraratchaphongsawadan Krung Ratanakosin chabap Hǫsamuthaengchat: Ratchakan

Thi 3—Ratchakan Thi 4, Samnakphim Khlang Witthaya, Bangkok, B. E. 2506.

二世王年代記： Phraratchaphongsawadan Krung Ratanakosin chabap Hǫsamuthaengchat: Ratchakan Thi 1—Ratchakan Thi 2, Samnakphim Khlang Witthaya, Bangkok, B. E. 2505.

ダムロン親王′序文： Čhotmaihet Rŭang Prap Khabot Wiangčhan, Bangkok, B. E. 2469.（ウィエンチャンの反乱の鎮圧に関する記録）に掲載されているダムロン親王の序文（pp. 1〜23.）。このダムロン親王の序文は′この事件の簡単な概説である。

古い家系′第四部： Lamdap Sakun Kao Bang Sakun, Phak Thi 4, Bangkok, B. E. 2481.

タイ国地理辞典： Akkharanukrom Phumisat Thai chabap Ratchabanditsathan, Bangkok, B. E. 2506〜10, 4 vols.

Walter F. Vella: Walter F. Vella, Siam under Rama III, New York, 1957.

H. G. Quaritch Wales: H. G. Quaritch Wales, Ancient Siamese Government and Administration, New York, Reprinted 1965.

Prince Chula Chakrabongse: Prince Chula Chakrabongse, Lords of Life, The Paternal Monarchy of Bangkok, 1782〜1932, London, 1960.

Erik Seidenfaden: Erik Seidenfaden, The Thai Peoples, Book I, Bangkok, 1963.

Mgr. Pallegoix: Mgr. Pallegoix, Description du royaume Thai ou Siam, Paris, 1854, 2 vols.

ウィエンチャン Wiangčhan のチャオ・アヌ Čhao Anu は謀叛を起こす

さて、ウィエンチャンのアヌは、[1]国へ帰ってから、[2]クルンテープマハーナコーン Krungthepmahanakhǫn[3]に対して叛旗をひるがえそうと考えた。そこで、ウッパラート Uparat とラーチャウォン Ratchawong[4]とスッティサーン Sutthisan と高官のターオピヤ Thaophia[5]を呼んで、相談して言うには、今バンコクには、若い王族しかいない。偉い役人も少ない。戦略も弱い。その上、チャオプラヤー・ナコーンラーチャシーマー Čhaophraya Nakhǫn Ratchasima[6]も、その城市にいない。途中の城市で、妨害するものもない。我々の立場は、極めて有利である。我々は属国たるべきではない。イギリス人がバンコクを苦しめているという情報もある。[7]もし我々が兵を挙げてバンコクを攻めれば、おそらく、容易に攻略できるだろう、と。ウッパラートは、タイ国は大きな国である。たとえ攻略できても、その地で彼等を支配することができるだろうか？国民も団結して抵抗するだろう。茨の上で寝ているようなものである、と言った。アヌは、攻略できても支配することができなければ、我々は住民を拉致し、国庫の財を奪い、我が国へ移す。我が国の方は、もし我々が国境の要害の地を守れば、敵は我々に対して何ができるだろうか？　糧食を補給する道も、遠くて険しい。一年中戦っても、我々は恐れない、と答えた。ウッパラートは、アヌは頑固で一方的だから、従わなければ殺されかねないと思い、賛成するふりをしなければならなかった。チャオ・ティサ Čhao Tisa という名前のこのウッパラートは、アヌの異母弟である。スッティサーンは、アヌの長男で、チャオ・ポー Čhao Po という名前である。そのラーチャウォンは、アヌの息子で、チャオ・ガオ・ラーチャブット Čhao Ngao Ratchabut という名前である。チャムパーサック Čhampasak を治めに行っているアヌの王子は、チャオ・ヨー・ラーチャブット Čhao Yo Ratchabut[8]という名前である。高官は五人おり、ピヤ・ムアンチャン Phia Mŭangčhan は北方を支配し、ピヤ・ムアンセーン Phia Mŭangsaen は南

方を支配し、パラット・ムアンセーン Palat Mŭangsaen はムアン・クラーン Mŭang Klang を、パラット・ムアンチャン Palat Mŭangčhan はムアン・サーイ Mŭang Sai を支配し、チャーノン Chanon は兵事部を支配している。越南の領土に接する境に、属邑が大小七九ある。

チャオ・ウッパラートはバンコクの属邑を誘う

相談がまとまると、アヌはウッパラートに、バンコクに従属する城市のカーラシン Kalasin とローイエット Rǫi-et とスワンナプーム Suwannaphum とチョンナボット Chonnabot とコーンケーン Khǫnkaen を誘いこみに行かせた。ウッパラートは、そこで、行つて、このすべての城市を誘つた。しかし、カーラシンの太守は、参加することを承諾しなかつた。ウッパラートは、そこで、彼を殺した。他の住民と太守たちは、ウッパラートがカーラシンの太守を殺したのを見て、ウッパラートの権力を恐れ、参加することを承諾した。ウッパラートは住民をウィエンチャンへ拉致させた。アヌは、そこで、息子のチャムパーサックの太守に書状を認め、地方の城市のケーマラート Khemmarat とウボン Ubon とシーサケート Sisaket とデートウドム Detudom とヤソートーン Yasothǫn の住民をウィエンチャンに拉致し、その上で、軍を率いて、アヌと同時に、ナコーンラーチャシーマーに行くように命じた。チャムパーサックの太守は、知らせを受けると、軍を率いて、住民をウィエンチャンへ拉致した。

そのウィエンチャンにおいて、戌の年・第八年の六月[9]、昼間、大風がおこり、吹いて、プラケーオ Phra Kaeo・プラバーン Phra Bang[10] の仏殿のチョーファー・バイラカー Chǫfa Bairaka[11] とアヌの家の屋根が、ひどく壊れた。アヌの妃の家は、五軒崩壊した。しかし、住民の家は、約四〇～五〇軒壊れた。一一月白月一四日、一五日[12]に至つた時、アヌは

まだ軍隊を集めていた。するとその時、深夜のおよそ一二時過ぎ頃、南の方角に木星が現われ、ウィエンチャンにおいて地震がおこつた。陶磁器と色々の物と金銀の装飾品がぶつかりあつた。翌日の明け方、地面が後の城壁内で、長さ約二ワー Wa[13]、幅約一ソーク Sok[14] 余り裂けているのが見えた。アヌは、そのように見たので、占星家を呼んで来て、吉凶如何、兵を挙げてバンコクを攻めれば負けるか勝つかを占わせた。占星家は、この事は大凶で、負けるだろう、と占つた。アヌは怒り、占星家を殺すように命じた。謝罪する者あり、命乞いをした。

チャオ・アヌは軍を率いてウィエンチャンから出発する

アヌは軍を編制し終ると、メーナム・コーン Mae Nam Khong[15] を渡り、バーン・パンプラーオ Ban Phanphrao に駐屯した。バーン・パンプラーオは、ウッパラートの住んでいる所であり、ウィエンチャンの対岸にある。アヌは、その地で、軍隊を訓練させていた。戌の年・第八年の二月黒月、アヌはラーチャウォンを、兵三〇〇〇を指揮する前衛軍の司令官とし、先発させた。ラーチャウォンは、三月黒月三日[16]、軍を率いてナコーンラーチャシーマー[17]に到着した。ラーチャウォンは、ナコーンラーチャシーマーにおいて、米の徴発を求めた。地方官吏のプラヤー・ヨッククラバット Phraya Yokkrabat[18] は、そこで、ラーチャウォンの所へ行き、どういう理由で、大兵を率いてやつて来たのか、と尋ねた。ラーチャウォンは、王書を得て、軍隊を集め、イギリス人と戦いに来た。ウィエンチャンの王様も一緒に来られ、ナム・チューン Nam Choen におられる。あと、二、三日で、ナコーンラーチャシーマーに到着されるだろう、と言つた。ラーチャウォンは、米を得ると、ムアンクワーチェンタイ Mũangkhwachiangtai を先にサラブリー Saraburi に行かせた。次いでラーチャウォンは、あとを追つて、三月黒月九日[19]、コーンクワーン Khǫnkhwang に駐屯した。ムアンクワーチェンタイは、そこで、ラーオ・プンダム Lao Phungdam[20] であるサラブリーの太守のプラヤー・スラーラーチャウォン

Phraya Suraratchawong と、ラーオ・ウィエンチャンである隊長のコーンカム Kǫngkham とコーンチェン Kǫng-chiang とコーンシン Kǫngsing を、コーンクワーンへ連れて行き、ラーチャウォンにお目通りさせた。ラーチャンウォンは、小隊長・隊長に言うには、越南人とイギリス人がバンコクを攻撃しに来るだろう。苦労するから、ここにいるな。ウィエンチャンに行ってしまえ。そうすれば、我々は共に幸福になるだろう、と。隊長・小隊長は、みな喜んで、合掌し、一緒に行くと承諾した。ラーチャウォンは、そこで、どの家の者も、一緒に来させよ、と隊長・小隊長に命令した。コーンカムとコーンチェンとコーンシンは、サラブリーの住民をウィエンチャンに行かせる相談をした。一方、アヌと息子のスッティサーンは、吉辰に至ると、軍を率いてラーチャウォンのあとを追い、三月黒月六日[21]、ナコーンラーチャシーマーに到着した。アヌは、ナコーンラーチャシーマーの東方のタレーヤー Thaleya に、大きな陣地を七つ築き、兵八万が到着したという流言を飛ばした。

アヌはナコーンラーチャシーマーの住民を拉致させる

その時、ナコーンラーチャシーマーの太守は、その城市にいなかつた。クカン Khukhan の太守のプラヤー・クライソンクラーム Phraya Kraisongkhram が、弟のルワン・ヨッククラバット Luang Yokkrabat と争い、戦い始めたのを鎮圧しに、王様が太守を御派遣になつたのだ。プラヤー・パラット Phraya Palat[22] と役人たちは、ナコーンラーチャシーマーの太守とともに、大勢で行つた。下級の役人だけが、その城市を守つていた。アヌは、そこで、プラヤー・プロムヨッククラバットを陣営に呼んで言うには、ナコーンラーチャシーマーの太守は、住民を苦しめている。アヌは、この方面を往来したところ、人が絶えずやつて来て、苦衷を訴えてばかりいた。プラヤー・ヨッククラバットをして、住民をウィエンチャンに拉致する準備をせしめ、わずか四日以内に終らせよ、と。プラヤー・ヨッククラバットは、アヌの権

力を恐れ、どうしたらよいか判らず、喜んでいるふりをして、従わなければならなかつた。そこで、プラヤー・ヨッククラバットは、ルワン・ナー Luang Na の娘と、大勢の美女を、アヌに与えた。次いで、アヌは、ラーオ人たちに、ナコーンラーチャシーマーの住民の武器を残らず集めに行かせ、鉈すらも持たせなかつた。

一方、プラ・スリヤパックディー Phra Suriyaphakdi（ポーム Pǫm）と有名なカールワン Khaluang[23] は、ラーオの城市を調査しに行き、ヤソートーンにいて、アヌが謀叛を起こしたことを知り、ウッパラートが兵を率いてヤソートーンに来たのを見た。そこで、プラ・スリヤパックディーは、ウッパラートに会いに行き、秘密裏に話しあつた。ウッパラートは、プラ・スリヤパックディーに頼んで言うには、ウッパラート自身は一緒に謀叛を起こすのではないと王様に奏上してもらいたい、と。次いで、ウッパラートは、書状を一通認め、アヌにもたらすべく、プラ・スリヤパックディーに与えた。プラ・スリヤパックディーは、急いで兵を率いてナコーンラーチャシーマーに至り、アヌを本営に訪ねた。プラ・スリヤパックディーは、ウッパラートの書状を取り出し、アヌに渡した。アヌは書状を見てから、行つてもよろしい、と言つた。アヌは、そこで、プラ・スリヤパックディーに命令して言うには、バンコクへ行つたら、王様に次のように奏上せよ。私は決して謀叛を起こすのではない。ナコーンラーチャシーマーとサラブリーの住民が、苦衷を訴え、太守と役人たちが彼等を非常に苦しめる。一緒に行つて住みたい、と言うので、軍を率いて住民を迎えに来た、と。プラスリヤパックディーは、おとなしく、畏れ慎んでいたので、アヌは気に入つた。アヌが彼に辞することを許すと、彼は暇乞いをして、出て象に乗つた。アヌは、そこで、チャオ・トーン Čhao Thong に、あとを追わせ、プラ・スリヤパックディーに、次のように告げさせた。チャオプラヤー・アパイプートーン Čhaophraya Aphaiphuthǫn の弟のプラ・アヌチットピタック Phra Anuchitphithak（ブワ Bua）は、親しい人である。アヌは、しばらく彼を、留めておくだろう、

と。プラ・アヌチットピタックは、そこで、アヌの軍中に属していなければならなかつた。プラ・スリヤパックディーは、急いで兵を率いて、プラヤー・ファイ Phraya Fai の森[24]の中のカンヤーオ Khanyao に至り、ラーチャウォンがサラブリーの住民を引き連れて行くのに出会つた。そこで、プラ・スリヤパックディーは、ラーチャウォンを訪い、報告して、ラーチャウォンに聞かせた。ラーチャウォンは、プラ・スリヤパックディーが行くのを許した。ラーオ人たちは、ラーチャウォンはプラ・スリヤパックディーを捕えるだろうと噂をした。軍中の高位者であるチェンタイ Chiangtai とターオピヤ Thaophia は、そこで、ラーチャウォンに、ウィエンチャンの王様が彼をお行かせになつたのだから、もし捕えれば、御命令以上のことになり、よろしくないでしよう。あなたは、どうお考えになるか、知りません、と言つた。ラーチャウォンは、黙つていた。プラ・スリヤパックディーは行つた。

プラヤー・パラットはアヌを訪う

一方、ナコーンラーチャシーマーの太守と一緒に行つたプラヤー・パラットは、アヌがやつて来て住民を拉致したという知らせを受けたので、ナコーンラーチャシーマーの太守と相談して言うには、住民を守りに行かず、見捨ててしまうことはできない。ラーオ人どもは、住民を悉く徹底的に痛めつけてしまうだろう、と。ナコーンラーチャシーマーの太守も賛成して、プラヤー・パラットを急いで行かせた。プラヤー・パラットは、ナコーンラーチャシーマーに至ると、アヌを訪い、次のように告げた。ナコーンラーチャシーマーの太守は、カンボジアに逃げて行つてしまつた。プラヤー・パラットは、住民を見捨てることができないから、王様のお供をして、一緒にウィエンチャンに行つて住みたい、と。アヌは信じて、プラヤー・パラットとプラヤー・プロムヨッククラバットに、住民を監督させて行かせた。ナコーンラーチャシーマーの住民は、出て行つたが、一日に少しずつしか行かず、一日の路程に三日も四日もかかつた。アヌは、彼等を分割

し、力を低下させた。地方官吏のプラヤー・パラットとプラヤー・プロムヨッククラバットは、そこで、一策を案じ、若い女を用意して、住民を監視しているすべての司令官・隊長はもとより、兵卒にさえ、どの女でも気に入つた者を与えた。ラーオたちと住民は、打ち解けて、融和したように見えた。プラヤー・パラットとプラヤー・プロムヨッククラバットは、馬に乗つてアヌを本営に訪い、報告して言うには、住民を連れて行つたところ、住民は飢餓に瀕した。道中、住民に与える糧食として、鹿を撃つことができるように、刀と斧と鉄砲を九挺か一〇挺いただきたい、と。アヌは、承諾した。刀と斧と鉄砲を得ると、住民を率いて行き、トゥン・サムリット Thung Samrit[25] に至つた。

ターンプージン・モー Than Phuying Mo はアヌの軍隊と戦う

プラヤー・パラットとプラヤー・プロムヨッククラバットは、策略を用いて言うには、住民は、疲れ、病気になつて死に、非常に苦しんでいるから、ひとまず、その地で休ませたい、と。住民が一斉に到着すると、地方官吏のプラヤー・パラットとプラヤー・プロムヨッククラバットは、秘密裏に計画を練つた。深夜のおよそ三時過ぎ頃、ラーオ人たちを、ほとんど皆殺しにした。住民はラーオ人から武器をたくさん得て、木を伐つてトゥン・サムリットに陣地を築く計画をした。生き残つたラーオ人たちは、アヌに報告しに来た。アヌは、そこで、五〇人の近衛兵に、馬に乗つて調べに行かせた、住民はラーオ軍の馬が来たのを見て、銃をとり、身を隠して狙撃し、たくさんのラーオ兵を殺した。ラーオ人の近衛兵は、そのように見て、驚いた。住民は、好機至れりと見て、馬に乗り、武器を手にして、ラーオ人の近衛兵を追い、更に殺した。生き残つたラーオ人の近衛兵は、アヌに報告しに来た。アヌは、そこで、スッティサーンとチャオ・カムプラー Čhao Kamphra とチャオ・パーン Čhao Pan に、兵三〇〇〇の軍を指揮させて、住民を攻撃しに行かせた。一方、地方官吏のプラヤー・パラットとプラヤー・プロムヨッククラバットは、スッティサーンとラーオ兵が大勢やつて来たの

を見たので味方を指揮して戦いに出た。男は左翼と右翼である。プラヤー・パラットとプラヤー・プロムヨッククラバットは、中央の部隊である。プラヤー・パラットの妻のターンプージン・モーは、援軍である女たちを指揮した。武器を持たない者は、木を切つて棍棒にしたり、先をとがらせて槍を作つたりして、ラーオ軍と戦つた。その時、ナコーンラーチャシーマーの住民は、ラーオ人たちを、約二〇〇〇人殺した。王様の御威徳のおかげで、たまたまスッティサーンに、非常にたくさんのナコーンラーチャシーマーの住民たちが、残らず武器を持つているように錯覚をおこさせた。スッティサーンは、そのように見たので、怖じ気がついて退却し、アヌに報告して言うには、住民は非常に頑強に戦つた。人もたくさん見えた。ひよつとしたら、ナコーンラーチャシーマーの太守の軍隊が、援けに来たのかもしれない、と。アヌは、そのように報告されると、思わず身震いして、軍を率いてバンコクに来ることを断念した。

アヌは退却する

一方、ラーチャウォンは、サラブリーの住民を拉致した。住民を率いてナコーンラーチャシーマーに至ると、直ちに、アヌに報告して言うには、タイ人を一〇家族、中国人を二〇家族、ラーオ人を一万人余り得て、三月黒月九日火曜日[27]、彼等を率いてサラブリーを出発した。バンコクの軍隊が各方面から攻めて来るという噂を耳にした、と。アヌは、そこで相談して言うには、ナコーンラーチャシーマーでバンコクの軍隊を邀えるのは、よくないだろう。挟撃されるのを恐れる。兵を多くの方面に分けて戦わなければいけない。もしノーンブワラムプー Ngongbualamphu に退いて邀えれば、この場所よりよいだろう、と。そこで、命じてナコーンラーチャシーマーと米倉と自分の陣地を焼かせ、四月黒月一一日[28]、軍を率いて帰つて行つた。ラーチャウォンには、軍を率いてロム Lom の方面へ行かせた。

疑問に思われることは、アヌは兵を挙げてバンコクを攻撃しに来たのに、何故一挙に攻めて来なかつたのだろうか？バンコクが気がつかないうちなら、容易に攻略できたであろう。バンコクが気がつき、直ちに軍を整え戦いに出動するまで、どういう理由で、ナコーンラーチャシーマーに居て、住民を拉致していたのであろうか？

それは、三つの原因で解決できる。すなわち、バンコクはまだ敗北する時には至らず、王様の御威徳[29]がまだ豊富にあり、アヌに考え違いをおこさせた。一つは、戦術に従つて考えると、アヌは、一挙に軍を率いてバンコクへ行つてしまえば、背後を警戒しなければならなくなるので、まず住民を悉く拉致して、背後の心配がなくなつてから、軍を率いて来ようと考えた。ナコーンラーチャシーマーに於ける仕事は、まる一年もかかると考え、大きな米倉に、糧食をたくさん運んでおいた。一つは、アヌが臆病者であつた。アヌは、何を考えるにも、ためらい迷つていた。そこで、このようになつた。

アヌはサーン山 Khao San[30] の上に本営を築く

さて、ラーチャウォンは、ロムの太守のプラ・スリヤウォンサー Phra Suriyawongsa を誘いこみに行つた。ロムの太守は、参加することを承諾した。ラーチャウォンは、そこで、ロムに駐屯した。一方、アヌとスッティサーンは、軍を率いてプーキョ Phukhieo に行き、太守を呼んだ。太守は、会いに出て来なかつた。アヌは、そこで、命じて軍隊を行かせ、彼を殺した。住民の一部は拉致することができたが、一部は密林に逃げこんでしまつた。アヌは、ノーンブワラムプーに行つて一つの大きな陣地を築き、プラヤー・ナリン Phraya Narin を兵三〇〇〇の陣地の隊長にした。次いで、アヌは、軍を率いてチョーン・カオ・サーン Chǫng Khao San[31] に行き、一つの陣地を築いた。そこは、道が二つに分

れる所である。アヌは、プラヤー・スポー Phraya Supho とチャーノン Chanon をその陣地の隊長にし、兵二万でその地を守備させた。次いで、アヌは、サーン山の上に本営を築いた。プラヤー・チェンサー Phraya Chiangsa は、サノム Sanom に一つの陣地を築いた。コーンカムには、チョーン・ゴワテーク Chǫng Nguataek に一つの陣地を築かせた。しかし、あのウッパラートは、スワンナプームに留まつていた。

クロムプララーチャウァンボーウォーンサターンモンコン
Krom Phraratchawangbǫwǫn Sathan Mongkhon[32] は
軍を率いてバンコクから出発する[33]

その戌の年の三月、アユッタヤーを守備していたプラヤー・チャイヤウィチット Phraya Chaiyawichit は、ラーチャウォンがやつて来て、サラブリーの住民を拉致した。ラーオ人たちは、喜んで皆行つてしまつた、と伝えて来た。王様は、報告書において、そのことをお知りになると、敵と戦うバンコクの防備を堅固にせしめ、将軍たちをして、バンコクの北にある川に向つて、ウワラムポーン Wualamphǫng 平地からバーン・カピ Bang Kapi 平地にかけて布陣せしめた。[34] そこは、ラーオ人が陸路軍を進めて来る道である。次いで、王様は、南方と北方の軍隊を集めるように御命令になり、副王を総司令官に任じ、まずサラブリーの方面へお行かせになつた。副王は、四月白月六日土曜日、[35] 軍を率いてバンコクから御出発になつた。次いで、プラ・スリヤパックディーがやつて来て、王様に拝謁し、彼が知つたところの事件を奏上した。そして、彼は、アユッタヤーに於て副王にお目にかかり、事情をお知らせした、と奏上した。王様は、プラ・スリヤパックディーは、ムアン・ラーオ Mǔang Lao[36] に於ける仕事に通じた者である。休息し、兵を交替させ、それから主力軍に従つて行け、とプラ・スリヤパックディーに仰せられた。一方、副王は軍をお進めになつて、タールア・プラ

プッタバート Tharŭa Phraphutthabat[37] に陣を築かれ、地方の軍隊と、まだ兵を集め終らぬバンコクの軍隊をお待ちになつた。準備が完了すると、軍を整え、プラヤー・チャーセーンヤーコーン Phraya Čhasaenyakǫn とプラヤー・カラーホームラーチャセーナー Phraya Kalahomratchasena とプラヤー・ピチャイヤブリンタラー Phraya Phichaiyaburinthara とプラヤー・ナロンウィチャイ Phraya Narongwichai を第一の前衛軍に、クロムマムーン・ナレーサラヨーティー Krommamŭn Naretsarayothi とクロムマムーン・セーニーボーリラック Krommamŭn Senibǫrirak を第二の前衛軍に、クロムマムーン・セーニーテープ Krommamŭn Senithep を主力軍のための一軍に、クロムマムーンナラーヌチット Krommamŭn Naranuchit とクロムマムーン・サワッディウィチャイ Krommamŭn Sawatdiwichai を左翼と右翼とに、クロムマムーン・ラーマイサレート Krommamŭn Ramaisaret とクロムマムーン・ティベーサラボーウォーン Krommamŭn Thibetsarabǫwǫn を軍の検査官に、クロムマムーン・テーパポンラパック Krommamŭn Thepphaphonlaphak を輜重隊に、チャオ・タークČhao Tak の息子のプラ・ナレーンタララーチャー Phra Narentharacha[38] を後衛軍に御任命になつた。副王は、プラヤー・ファイの森の方面へ軍をお進めになるだろう。副王は、また次のように御命令になつた。チャオプラヤー・マハーヨーターČhaophraya Mahayotha には、モーン族の一軍を指揮させて、プラヤー・クラーン Phraya Klang の森の方面へ行かせ、サムハナーヨック Samuhanayok[39] であるチャオプラヤー・アパイプートーンČhaophraya Aphaiphuthǫn には、兵五〇〇〇のバンコクと地方の軍隊を指揮させて、ペーチャブーン Phetchabun の方面へ行かせ、プラヤー・ペートピチャイ Phraya Phetphichai とプラヤー・クライコーサー Phraya Kraikosa には、兵三〇〇〇の北方の軍隊を指揮させて、ピッサヌローク Phitsanulok・ナコーンタイ Nakhǫn Thai[40] の方面へ行かせ、ロムサック Lomsak[41] に駐屯しているラーチャウォンを、チャオプラヤー・アパイプートーンと同時に挾撃させ、プラヤー・ラーチャニクーン Phraya Ratchanikun とプラヤー・ラームカムヘーン

Phraya Ramkamhaeng とプラヤー・ローンムアン Phraya Rǫngmŭang とプラヤー・チャンタブリー Phraya Čhanthaburi には、兵を指揮してバッタボーン Battabǫng[42] の方面を通つてスリン Surin・サンカ Sangkha[43] へ行き、一軍の森のカンボジア人[44]を集めさせるように御命令になつた。次いで副王は、更に四つの軍隊を、チョーン・ルアテーク Chǫng Rŭataek の方面を通つてプラーチーンブリー Pračhinburi の方へ行くように御命令になつた。すなわち、第一のプラヤー・ラーチャスパーウァディー Phraya Ratchasuphawadi の軍隊と、第二のチャオプラヤー・プラクラン Čhaophraya Phrakhlang の軍隊と、第三のクロムマムーン・ピピットプーベーン Krommamŭn Phiphitphuben ならびにクロムマムーン・ピタックサテーウェート Krommamŭn Phithaksathewet の軍隊と、四つの軍隊をすべて指揮する司令官のクロムマムーン・スリンタララック Krommamŭn Surintharark の軍隊である。しかし、プラヤー・ラーチャスパーウァディーの軍隊は、ボーポーン Bǫphong[45] の方面を通つてプラーチーンに行き、プラチャンタカーム Pračhantakam[46] に於て、四つの軍隊が一緒になる。チャオプラヤー・プラクランの軍隊とクロムマムーン・ピピットプーベーンならびにクロムマムーン・ピタックサテーウェートとクロムマムーン・スリンタララックの軍隊は、クローン・サムローン Khlǫng Samrong[47] の方面を通つてプラーチーンに行き、プラチャンタカームに進んで、一斉に陣を張る。そこで、副王は、まずプラヤー・ラーチャスパーウァディーの軍隊を出発させ、次いで、チャオプラヤー・プラクランの軍隊を第二番目に、クロムマムーン・ピピットプーベーンの軍隊を第三番目に出発させ、次々に出発させた。

註

(1) アヌの full name は、アヌウォン Anuwong。
(ダムロン親王、序文、P. 3.)

(2) アヌは、一八二五年、二世王の葬儀に参列するためバンコクに来た。「三世王年代記」は、次のように言う。「その時、ウィエンチャンのチャオ・アヌは、バンコクにやつて来て王様に伺候し、葬儀の間、手伝つた。人々がたくさんやつて来たので、王様は御考えになつた末、一緒に来た兵たちをして

スパン（スパンブリー Suphanburi。メーナム・ターチーン Mae Nam Thačhin の左岸、アユッタヤーの西方約四〇km.）に行かせ、砂糖椰子を伐り、数量を指定せず、川岸まで引いて来るように御頼みになつた。この砂糖椰子は、サムットプラーカーン Samutprakan に運んで使うのである。アヌは、そこで、ラーチャウォンに人々を監督させ、仕事をしに行かせた。雨季が迫つた時、アヌは帰つて行くので、宮廷のラコーン（タイ国の演劇）の女優たちと、ウィエンチャンのラーオ人のドゥワンカム Duangkham と、トンブリー Thonburi 王（鄭昭、在位一七六七～八二）時代以来拉致されてサラブリー Saraburi（アユッタヤーの東北約四〇km.）に住みついている住民をいただきたい、と王様に申しあげた（一七七八年、鄭昭の軍隊がウィエンチャンを攻撃し、ラーオ人をタイ国に拉致したことをさす）。王様は御与えにならなかつた。アヌは、チャオクンウァンルワン Čhaokhunwangluang が世話したチャオプラヤー・アパイプーベート Čhaophraya Aphaiphubet の一人の歌手を得ただけであつた。アヌは、そこで、王様にお暇乞いをし、自分の願いが適えられなかつたので心を痛めてウィエンチャンに帰つて行つた。（「三世王年代記」、pp. 29～30.）

(3) クルンテープマハーナコーンは Bangkok. 以下バンコクと訳す。。Krungthep は天人の都、Mahanakhɔn は大いなる都の意。

(4) In the Laotian states as in the Malay vassal states, the Siamese interfered little in local administration. Each state possessed its own hereditary rulers—the Čhao, or vassal chief, and his principal officers (the Uparat or Upahat, the Ratchawong, and the Ratchabut)—, and their investiture in office by the King of Siam was usually a simple formality. (Walter F. Vella, p. 79.)

(5) ラオスの高官が有する称号。

(6) チャオプラヤー・ナコーンラーチャシーマーは、ナコーンラーチャシーマー（コーラート Khorat）の太守（チャオ・ムアン Čhao Mŭang）。チャオプラヤーは、当時の爵位（一代制）中、最高のもの。すなわち、次の順序である。チャオプラヤー Čhaophraya, プラヤー Phraya, プラ Phra, ルワン Luang, クン Khun。

(7) Henry Burney が来たことをさす。Burney がバンコクに来たのは一八二五年であり、翌一八二六年、タイ国とイギリス東インド会社との間に修好通商条約が締結された。

(8) 「二世王年代記」によると、2362 B. E. (1819～20 A. D.) チャムパーサックにカー族の暴動がおこり、二世王は、ナコーンラーチャシーマーの太守とウィエンチャン王アヌに、その鎮定を命じた。アヌは、チャオ・ヨー・ラーチャブットを派遣し、その暴動を鎮定した。乱後、二世王は、アヌの要

求により、チャオ・ヨー・ラーチャブットをチャムパーサックの太守に任じた。これにより、ウィエンチャンは、南ラオスに勢力を拡張した。(「二世王年代記」、pp. 600〜604.)

(9) 戊の年・第八年の六月は、一八二六年五月六日〜六月四日。

(10) プラケーオとプラバーンは、ともに仏像の名前。一七七八年、タークシン王の軍隊がウィエンチャンを占領した時、プラケーオとプラバーンはトンブリーへ移された。その後、一七八二年、一世王はプラバーンをウィエンチャンへ返還した。一八二七年におけるタイ軍のウィエンチャン占領後、プラバーンは再びバンコクへ移された。その後、一八六六年、四世王はプラバーンを、ルワンプラバーン Luang Phra-bang 王へ返還した。プラケーオは、バンコク王朝の成立以来、王宮内の寺院に納められた。(Cf. ダムロン親王、序文、pp. 2〜3. The Dynastic Chronicles Bangkok Era, The Fourth Reign, translated by Chadin Flood, Tokyo, 1966, vol. 2, pp. 470〜479.)

(11) チョーファーとバイラカーは、ともに寺院の屋根の装飾物。

(12) 一八二六年一〇月一五日一六日。

(13) 一ワーは一尋。

(14) ソークは、肘から中指の先端までの長さ。

(15) メーコーン河。

(16) 一八二七年二月一四日。

(17) アヌがバンコクで死んだ翌年の一八三〇年以来、長年タイ国に滞在した司教の Pallegoix は、その著書 "Description du royaume Thai ou Siam, 1854, 2 vols" において、コーラート(ナコーンラーチャシーマー)について次のように言う。「この小さな州は、かつてはシャムとカンボジアとの境界をなした町であつた。この町が Nakhon- Raxa-Séma (原註:国境の町)とよばれるのは、このためである。現在、この町には小さな王がいて、王は南北約四〇里にわたる地域を支配している。コーラートはシャムとカンボジアとの間で最も高い地点である。すなわち町は城壁に囲まれ、四方を見おろす岡の上に立つている。けれども町に達するには、六日間、Dong-Phaja-Fai (原註:火の王の森)とよばれる有名な森を抜けて、たえず登つて行かなければならない。名前を聞くさえ恐ろしい森である。実際、多くの旅行者が、この森の薄気味わるい小暗さの中で命をおとす。一説によれば、この森の中には数箇所、砒素をふくむ地帯があり、旅行者は塵状になつた砒素を吸うといわれ、さらに多くの人々も、そのことが原因で死ぬといわれている。コーラート州の人口は約六万だが、町の住民は七千にすぎず、半分はシャム人、半分はカンボジア人である。州には、いくつかの非常に埋蔵量の豊富な銅山がある。また最近、四つか五つの製糖工場が建設された。なおまた、この地方は、象牙、革、角、小豆蔻、紫檀、肉桂なども産する。(Mgr. Pallegoix, vol. 1, pp. 33〜34.)

(18) ヨッククラバットは地方検察官。ヨッククラバットは、また、太守を監視する職務を有した。

(19) 一八二七年二月二〇日。

(20) 北タイのラーオ族はユワン Yuan とよばれるが、以前はラーオ・プンダムともよばれた。ダムは黒、プンは腹の意、すなわちラーオ・プンダムは黒腹ラーオ。これは、彼等が腹に入墨をしていたことに基づく。これに対して、東北タイのラーオ族は腿に入墨をしていたので、ラーオ・プンカーオ Lao Phungkhao, 白腹ラーオとよばれた。(Cf. Erik Seidenfaden, p. 104.)

(21) 一八二七年二月一七日。

(22) プラヤー・パラットは、ナコーンラーチャシーマーの副太守。パラットは次席、代理の意。

(23) カールワンは、随時地方に派遣される国王の特派使節。

(24) ドン・プラヤー・ファイ Dong Phraya Fai。ドンは森、ファイは火の意。四世王時代以来、ドン・パヤー・ジェン Dong Phaya Yen とよばれるようになつた。現在、ドン・パヤー・ジェンは、山脈の名称として使われている。ドン・パヤー・ジェン山脈は、次の諸地域を含む。(1)チャイヤプーム県バムネットナロン郡。(2)ナコーンラーチャシーマー県ダーンクントット郡。(3)ロッブブリー県チャイバーダーン郡。(4)ナコーンラーチャシーマー県パークチョーン郡。(5)ナコーンラーチャシーマー県(パークチョーン郡)・サラブリー県(ケーンコーイ郡)・ナコーンナヨック県(ナコーンナヨック郡)三県の県境。往時、バンコクとナコーンラーチャシーマーとは、この山脈で往来が不便であつたが、ナコーンラーチャシーマーから南ラオスにかけては、土地が平坦であり、またメーコーン河に注ぐメーナム・ムーン Mae Nam Mun も両地方を結ぶ重要な路線であつたと思われる。(Cf. 註17。「タイ国地理辞典」, vol. 2, pp. 331～332.)

(25) サムリットは、現在、ナコーンラーチャシーマー県ピマーイ Phimai 郡に属する村で、ピマーイの西方約一一 km にある。トゥンは田野、平野の意。トゥン・サムリットは、ピマーイ郡からチュムプワン Chumphuan 郡にかけての田野。(Cf.「タイ国地理辞典」, vol. 3, p. 1427.)

(26) ターンプージンは、～夫人の意で、高位の女性に与えられた称号。

(27) 一八二七年二月二〇日。

(28) 一八二七年三月二三日。

(29) バーラミー Barami (波羅蜜)。

(30) カオ Khao は山の意。

(31) ノーンブワラムプーの北方約三三 km の Chong Khao San か?

(32) クロムプララーチャウァンボーウォーンサターンモンコン(またウァンナー Wang Na という)は、副王(ウッパラート Uparat)の称号。以下、副王と訳す。三世王の副王は、

三世王の叔父（一世王の王子）にあたる。一八二四年、副王の位につき、一八三二年死す。（Cf. Prince Chula Chakrabongse, p. 146.）

(33) 「大南寔録正編第二紀」明命八年三月の条（巻四四）は、次のように言う。「万象与暹構兵相攻、初万象国長阿弩之女嫁于暹、生森麻謁、暹人又娶国人、生村椅破、椅破既長、謀奪嫡、遂弑森麻謁、暹王不之禁、阿弩以此怨暹、乃挙兵攻取古落城、殺暹兵五百餘、暹王怒遣詫昭冤那暹二王之称、領将士数万撃之、嘉定総鎮黎文悦先得辺報以聞、帝以甘露上道通于暹、命管道宋文琬、即往辺地探訪其事、諭、嗣有関緊辺務、当立報者、聴得具摺直達。」明命八年は一八二七年。越南の史書は、ルワンプラバーンを南掌、ウィエンチャンを万象と称す。阿弩 A-nǒ はチャオ・アヌ。古落 Cǒ-lạc はコーラートすなわちナコーンラーチャシーマー（Cf. 宋福玩・楊文珠「暹羅国路程集録」香港中文大学新亜書院研究所東南亜研究室、1966, p. 28.）。

(34) ダムロン親王の序文は、「サームセーン Samsen 平地からホワラムポーン Hualamphong 平地にかけて布陣せしめた。」と言う。（ダムロン親王、序文、p. 8.）

(35) 一八二七年三月三日。

(36) ラオス。

(37) タールアは、現在アユッタヤー県に属し、サラブリーの西方約二〇 km メーナム・パーサック Mae Nam Pasak 右岸にある。プラプッタバートは、現在サラブリー県に属し、タールアの東北約一八 km にある。プラプッタバート（仏足の意）は、仏足跡で有名なアユッタヤー時代以来の聖地である。タールア・プラプッタバートは、アユッタヤー県のタールアを指す。古来、プラプッタバートに詣でる巡礼は、しばしば水路（メーナム・パーサック）を利用し、タールアで上陸した。またタールア（渡し場、港の意）という所は多いので、アユッタヤー県のタールアを、タールア・プラプッタバートとよんだ。（Cf.「タイ国地理辞典」、vol. 2, pp. 485～486., vol. 3, pp. 918～919.）

(38) チャオ・タークはタークシン王、鄭昭をさす。プラ・ナレーンタララーチャーはタークシン王の王子であり、母はクロムボーリチャーパックディーシースダーラック Krombǫrichaphakdisisudarak（チム Chim）である。（Cf.「古い家系」、第四部、p. 2.）

(39) サムハナーヨックは、民部省（クロム・マハートタイ（Krom Mahatthai）の長官。これに対して、兵部省（クロム・カラーホーム Krom Kalahom）の長官は、サムハカラーホーム Samuha Kalahom とよばれた。一般行政と軍事行政の分離は、一五世紀におけるボロム・トライローカナート Bǫrom Trailokkanat 王の行政改革に始まるが、実質的に両者が分離したのは、五世王（在位一八六八～一九一〇）時代における軍制改革以後である。当時、サムハナーヨ

ックもサムハカラーホームも、ともに軍事行政ならびに一般行政に対して責任を有し、前者が北部諸州を担当したのに対して、後者は南部諸州を担当した。(Cf. H. G. Quaritch Wales, pp. 84～88.)

(40) ナコーンタイは、ピッサヌロークの東北約七五 km。

(41) ダムロン親王の序文によると、「古いロムサックは、ウィエンチャンの反乱の鎮定後に建設されたロムサックの北方にあつた。」(ダムロン親王、序文、p. 10.)

(42) バッタボーンは、現在、カンボジアの Battambang。

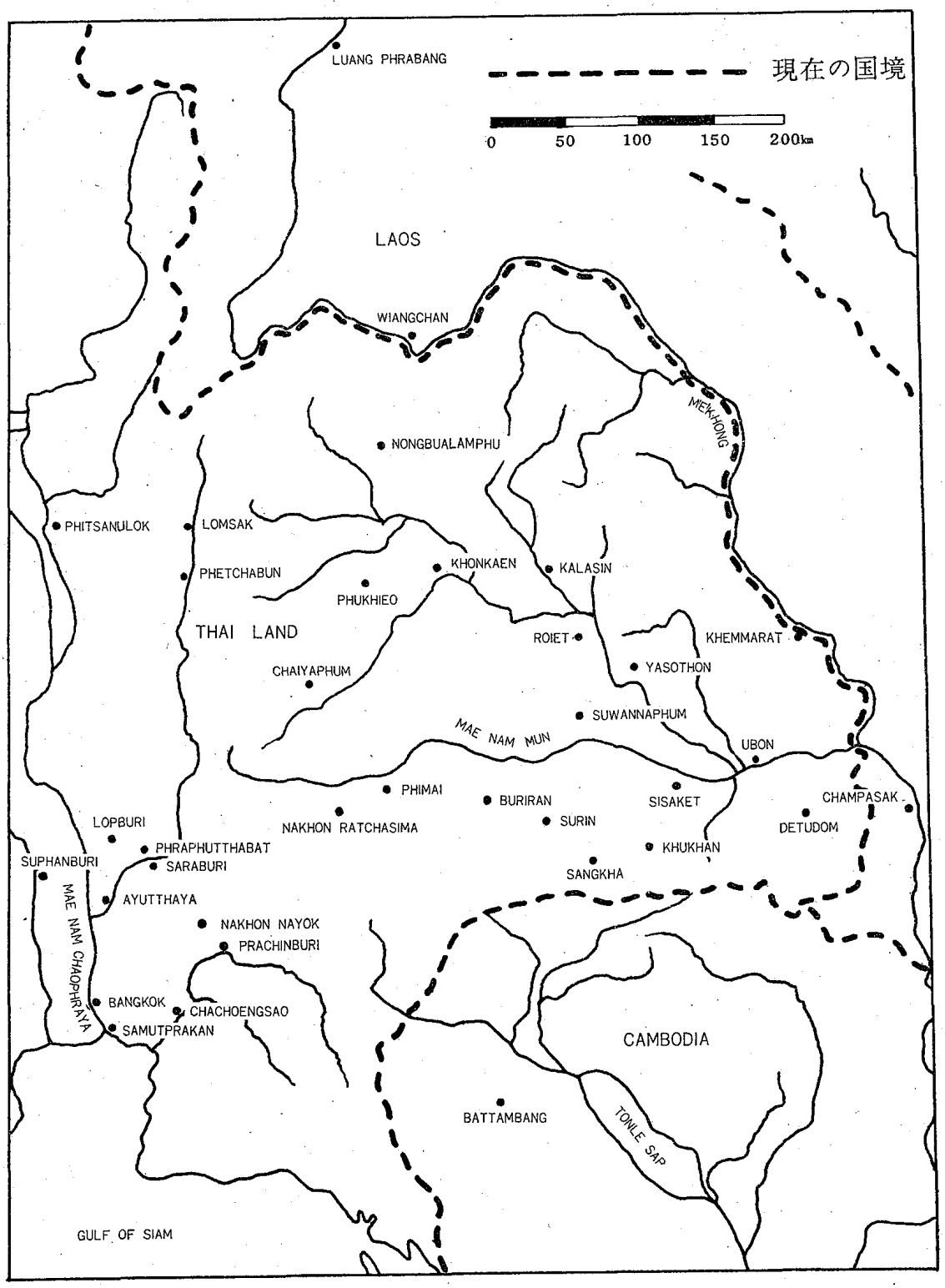
(43) サンカは、スリンの東南約四五 km。

(44) カメーン・パードン Khamen Padong。森のカンボジア人の意。カメーン・パードンは、東北タイのブリーラム Buriram, スリン Surin, シーサケート Sisaket 等の諸県に住むカンボジア人をさす。

(45) ボーポーンは、現在、アユッタヤー県ナコーンルワン Nakhonluang 郡に属する村。(Cf.「タイ国地理辞典」、vol. 2, p.617.)

(46) プラチャンタカームは、プラーチンブリーの東方約一五 km。

(47) クローンは運河の意。サムローン運河は、メーナム・チャオプラヤーとメーナム・バーンパコン Mae Nam Bangpakong を結び、サムットプラーカーン・チャチュンサオ両県を流れる運河で、アユッタヤー時代の築造。(Cf.「タイ国地理辞典」、vol. 3, pp. 1447～1448.)


現在の国境
0 50 100 150 200km
LUANG PHRABANG
LAOS
WIANGCHAN
MEKHONG
NONGBUALAMPHU
PHITSANULOK
LOMSAK
PHETCHABUN
KHONKAEN
KALASIN
PHUKHIEO
THAI LAND
ROIET
KHEMMARAT
YASOTHON
CHAIYAPHUM
SUWANNAPHUM
MAE NAM MUN
UBON
PHIMAI
BURIRAN
SISAKET
CHAMPASAK
LOPBURI
NAKHON RATCHASIMA
SURIN
DETUDOM
PHRAPHUTTHABAT
KHUKHAN
SUPHANBURI
SARABURI
SANGKHA
AYUTTHAYA
MAE NAM CHAOPHRAYA
NAKHON NAYOK
PRACHINBURI
BANGKOK
CHACHOENGSAO
SAMUTPRAKAN
CAMBODIA
BATTAMBANG
TONLE SAP
GULF OF SIAM